

氏名	前 田 幸 夫
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第 784 号
学位授与の日付	昭和 51 年 6 月 30 日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)
学位論文題目	慢性肝疾患の経過過程にみられる多様性肝細胞群に関する検討
論文審査委員	教授 大藤 眞 教授 小川勝士 教授 妹尾左知丸

学位論文内容の要旨

慢性肝疾患の経過中に、多様性肝細胞群が、Eosin 好染性および淡染性の細胞集団として、小葉あるいは偽小葉の一部または全体にみられる。著者は、この現象が肝疾患慢性化の機序に関与しているのではないかと考え、肝疾患 184 例より腹腔鏡直視下に得られた生検肝組織片を観察材料として、これら細胞群の特徴を、細胞学的・細胞化学的ならびに細胞構築の面から求めるとともに、これら細胞群の消長や、これらの出現と肝の病態との関係につき検討を加えた。

1. Eosin 好染性細胞群に二核細胞が多く、Glucose 6-phosphatase, Succinate dehydrogenase, glutamic-oxaloacetic transaminase 活性と細胞質・核小体の RNA 量およびアルブミン含有細胞の数が正常ないしは増加の傾向にあり、Glucose 6-phosphate dehydrogenase 活性が上昇しないことから、その染色異常を除けば、正常に近い細胞ではあるが、再生期にある細胞と考えられた。一方 Eosin 淡染性細胞群は、機能的低下ないし脱分化の傾向がうかがわれた。また、Eosin 淡染性細胞群よりなる結節はより肥大性を示した。
2. Eosin 好染性細胞群は、垂小葉性壊死を伴う慢性肝炎および結節形成の未熟な肝硬変に高頻度に認められ、一方 Eosin 淡染性細胞群は慢性肝炎から完成した肝硬変に進展するにつれて高頻度となり、両細胞群の間に時相の差を認めた。
3. 肝細胞壊死巣の大きい程、Eosin 好染性細胞群の出現率が高く、壊死野の吸収期に最も染色性が強く、その後は消退する傾向にあった。一方 Eosin 淡染性細胞群は壊死野吸収期以後にみられ、Eosin 好染性細胞群に遅れて出現したが、両者の間に移行が存在するかどうかは確定できていない。

4. Eosin好染性細胞群の局在では門脈枝周辺に位置する例が認められ、良好な血流状態の関与を示唆した。また Eosin 好染性結節の成因の1つとして残存肝細胞からの再生に注目した。

論文審査の結果の要旨

本研究は慢性肝疾患の経過過程にみられる多様性肝細胞群について臨床的に研究したものであるが、従来十分確立されていなかったこの方面の知見について詳細なる検討を加え、重要な成績を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。